2019.3.2（土）天気/晴れ　参加者/一般９人（内、子ども４人）　指導員２人（森功一、辻愛子）暦/雨水、末候「草木萠動（そうもくめばえいずる）」　観察/ゾウムシの幼虫、シメジのようなきのこ、松の表皮、レンギョの枝にぶら下がるたくさんのミノムシ、ザイフリボクの冬芽、梅（ほぼ満開）、カクレミノの葉っぱ（グーチョキパー）、オオイヌノフグリ、カエルの卵見つけられず（最近まで柵の工事で水が抜かれていたからか）

新しいお友達が参加してくれ、春の訪れとともにわくわくした始まりとなった。森に入る前に、森さんが自宅で育てているというシイタケの原木を見せてくれた。シイタケが育っている原木とまだの原木、どっちが軽いかな？と、代わる代わるに原木を抱えてみる。シイタケが何を食べて大きくなったかという秘密に迫るが、ちびっこたちは原木を抱え、自分ひとりで持てたことがうれしそうで、その秘密はそっちのけのようだった。

何か森で見つけたら教えてね、と話したその言葉通り、すぐにるかちゃんが森の入口で見つけたちっちゃなどんぐりを見せてくれた。すると手のひらからコロンと落ちてしまい、見つけようと足を動かした瞬間、「あっ！」パキッとどんぐりが割れてしまった。せっかく見つけてくれたどんぐりを踏んでしまい申し訳ない気持ちでいると、るかちゃんがそのどんぐりを拾うなり、こわい～！なんか出てきた！とどんぐりの中から何かを見つけた。ん！大丈夫、大丈夫、こわくないよ～。よく見つけたね～！といきなり森の生きものを見つけたことがうれしくていると、どれどれどれ、よく観てみようかぁ、と森さんもうれしそうだ。虫眼鏡をとり出すと、みな興味津々にどんぐりの中にいた生きものを見はじめた。ゾウの鼻みたいな長～い口を持つ虫になるんだよ。次々に虫眼鏡を覗き込む。森の中では、どんぐりもこうしてまた他の生きものの家になったり、食べられたりしている。

森に入ると、先月凍っていた湿地帯の水たまりは、もうすっかり溶けていた。空を見上げると葉っぱが茂っている木と、まだ枝だけの木。光は確実に強く明るくなっているが、冬と春はまだ同居している。

三大美芽のザイフリボクの芽を見てみたいんです！菅原さんのリクエストにお応えし、森さんの案内で、普段とは違ったルートで進む。あった！赤い芽からやわらかな綿毛のよう銀色のようなみどりが顔をのぞかせていた。確かに、このあとどんなふうにこの芽が変化をとげていくのか、冬芽の続きが見てみたくなった。

大人たちの感激とは裏腹に、子どもたちは美芽にはまったく興味を示さない。子どもの興味は、これ見て！と斜面ふもとにある直径１５㎝ほどの大きな穴だった。視線は一気に下へ。確かにわくわく感をそそる。穴の中に何かいるのかもしれない。中を覗いてみるが、何もいない。注意しながら穴の中を探ってみるが、穴の先は行き止まりだった。それにしてもどうしてこんな大きな穴が開いているのだろうと、その訳はわからないまま想像力だけかき立てられてその場をあとにする。

春の日差しが強くまぶしく、池の向こう側の木々が放っている芽吹き間近のサインを感じながら、広場のまん真ん中でスケッチブックを広げ、ワイワイ言いながら思い思いに今日の１枚を描いた。